

浜名湖花博で作成された植物標本

杉野 孝雄

本会が委託を受けて実施した、「浜名湖花博出展植物保存事業」で作成された植物標本は、元浜名湖花博会場内のガーデンパーク建設室事務所で、2月9日、池谷理事長が出席されて、静岡県企画部との間で引渡しが行われました。

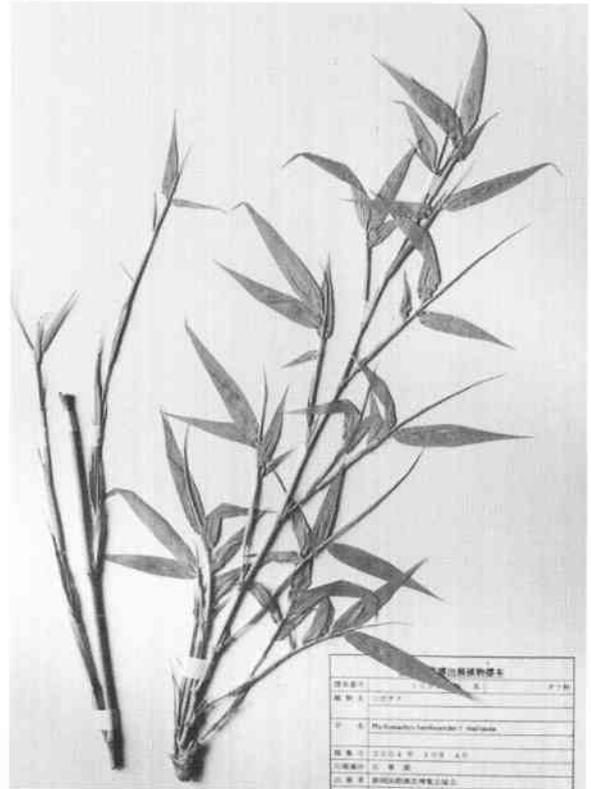
標本は押し葉標本にして4,510点、1種類5点を目標に作成されているので、これを2分して、30種類ずつビニール袋に入れ、茶箱12箱に保存してあります。標本は学術的に分類して通し番号を付け、一覧表にまとめてあるので、利用する時は容易に目的の標本が引き出せます。

台紙に貼り完成標本にしたのは110点、残りは新聞紙半折りにした間にはさんで保存してあるので、今後、完成標本にしていくことが必要です。

作成された植物標本については別途紹介する予定ですが、そのいくつかを紹介します。まずはバオパブの花の標本が作成できたことです。オーストラリア産のグレゴリー種は、日本では野外で開花した例はないようです。4月当初は葉もなく心配されましたが、葉を広げ、8月14日20時24分に開花しました。その後も花が咲き続けたので、それを標本にすることができました。バオパブの花の標本は、日本にはあまりないと思われます。

植物の分布は北半球と南半球とでは大きく異なり、南半球には科属で日本では見られない種類が多数あります。バンクシア、メラレウカなど南半球特有の科属の植物を、50種類ほど標本にすることが出来ました。その他、原種で日本に分布しない種類。日本に自生するヒメバラモミ、トガサワラなど貴重な植物も標本にしました。

園芸植物として作出された園芸品種、これが標本の大多数を占めています。遺伝の知識も乏しい江戸時代に、遺伝の原理を応用して日本で独自に発達した、珍しい変化アサガオは15種



シボチク タケ科

「竹笹の庭」には多種類の竹笹が植えられていたので、斑入りなど45種類を標本にしました。シボチクはその中のひとつで、稈の表面に縦じわが多数出るので、皺竹と名付けられました。

類を標本にしました。園芸植物にバイオテクノロジーを導入して作出されたバイオコスモスの標本。薬用植物、香料植物、果樹など、出展された様々な植物を標本にしてあります。

花博が開催されたことで見ることの出来た植物を、さらに標本として実物を保存することで、永久に利用できるようになった意義は大きいと思います。

作成された植物標本は6月5日に開園が予定されている「浜名湖ガーデンパーク」で展示されるなど活用が期待されます。

「バードピア浜北」と県立森林公園

土屋たかみ



アカマツ林での自然観察に出発



昆虫の観察

11月21日(日)、秋晴れのもと、東京から参加して下さった会員をはじめ30名が、森林公園ビジターセンター「バードピア浜北」に集合しました。

平成16年3月26日にオープンした「バードピア浜北」は、自然と人との「共生」を基本理念に3年をかけて整備され、鳥類を中心とした自然情報の発信や四季折々の新しい情報を提供し、また森の自然を体験・学習することもできる施設で、施設自体も環境に配慮した造りになっています。

センターの屋根全体には芝が張られ、屋根に降った雨水は施設内部のトイレや屋外の散水に利用されています。南側の屋根には太陽光発電装置もあり、施設で使う総電力の約4%を補い、自然採光・自然換気を導入し、天竜杉など県産材を使用しています。

玄関を入ると広い展示ホールには、床面に張られた県西部地区の航空写真と円形の枠の中に入った公園周辺の模型のある「情報ゾーン」があり、自然観察に必要な情報を得ることができます。「観察ゾーン」には長い観察テラスがあり、観察ポイントや方法を体験できます。「体験展示ゾーン」では、木の香りや鳥の声などを学べたり、体験ジオラマでは森の一日を映像で

体験できます。「創作展示ゾーン」では、公園利用者が写した写真や絵画の展示スペースとなり、当日は浜松在住の西村幸近さんによる「透明水彩・野鳥画展」が開催されていました。20年間に及ぶ観察経験による絵は、繊細であると共に色彩がとてもすばらしいものでした。「体験展示ゾーン」に続く展示室には杉野孝雄先生の植物標本を見ることができ、森林公園の自然観察ガイドブックの著者の一人でもあります。

「バードピア浜北」で森林公園に関する情報を得たところで、観察会に出発しました。豪華な顔ぶれの各専門の先生方(杉野孝雄氏(植物)、高橋真弓氏(昆虫)、諏訪哲夫氏(昆虫)、三宅隆氏(野鳥))が講師となり、「小鳥の道」を通り「うぐいす谷親水広場」「西ノ谷奥池」「スポーツ広場」を目指しました。

アカマツ林の中、低いところにはウラジロやコシダが茂り、リョウブ、タマミズキ、モミジバフウ、イロハモミジの黄色や赤色の紅葉がすばらしく、「うぐいす谷親水広場」付近ではオオアオイトトンボ、マユタテアカネ、ヤマトシジミ、ツマグロヒョウモンが観察できました。途中遊歩道周りで土が盛り上がっている所が多く見られたのですが、イノシシによるものと教えていただきました。



野鳥の観察



なにかみつかったかな？

「スポーツ広場」では、ノウサギの糞をたくさん見ました。自分ひとりでは気が付かなかったと思います。「西ノ谷奥池」では、マガモがゆったりと泳いでいました。また、落ち葉の広がる土の上を歩くピンズイや、木の実を食べているアオグワを東屋から観察しました。

「スポーツ広場」の周囲には、西洋トチノキの黄色に紅葉した木がたくさん見られたのですが、フランスで「マロニエ」と呼ばれている木と同じことを初めて知りました。

昼食後は「いこいの道」、「花木の道」、「森林公園会館」前を通り「木工体験館」までの散策をしました。途中遊歩道脇に湿地があり、「トウカイコモウセンゴケ」、「サワシロギク」を教えてくださいました。湿地の植物は、湿地がなくなると絶えてしまい、今各地の湿地がどんどん減っているので、なくなっていく湿地の植物をふやす試みが、森林公園の湿地で行われています。

散策に少し慣れ、「モミジバフウ」のきれいに紅葉した葉をバッグのポケットに飾る人や手に持って歩く人もいました。

「木工体験館」では、地元産のスギ材やヒノキ材を使って木工作をしていましたが、指導員の大都さんがヒノキ材で作製した鳥の模型は、本物そっくりで足の細部にいたるまで丁寧に作られており、100体位あるのには驚きました。

庭では、子供たちの手からヒマワリの種を食べに来るヤマガラに出会いました。こんなに身近に自然を感じ、楽しむことができることは本当にすばらしく、気分が爽快になった一日でした。



木工体験館の鳥の模型

森林公園は、215haの県営林の中、1,000種以上の植物や約100種の野鳥が確認され、チョウやトンボなどの昆虫も豊富に生息しています。

今回の散策路はほんの一部なので、是非機会を見つけてまた歩いてみようと思いました。

森林公園には、長さ150m、高さ48mの大きなつり橋があります。「空の散歩道」と名づけられ、まさに空の中を歩くようなすばらしい眺めです。お天気の良い日に歩くことをお勧めします。

浜名湖花博で作成された植物標本の紹介

杉野 孝雄

「浜名湖花博出展植物保存事業」で作成された、植物標本 4,510 点の中から特徴的な種類を紹介します。

変化アサガオ ヒルガオ科

江戸時代、メンデルの法則発見の 100 年も前に、遺伝の原理を応用して、日本で独自に作出されたアサガオです。「青斑入蝉葉木立青鳩丸咲」など、特有の名前のつけ方も興味をひきます。15 種類を標本にしました。

バイオコスモス キク科

チョコレートコスモスの栽培しにくい難点を克服するため、千葉大学園芸学部でチョコレートコスモスとキバナコスモスから、バイオテクノロジーを使い作出されました。コスモスは 12 種類を標本にしました。

アメリカフヨウ 大紅 アオイ科

アメリカフヨウとモミジアオイの交雑種で、15 年の歳月を費やして作出されました。花は直径 30cm 以上あり、標本にすると新聞紙の幅からはみ出しました。ハイビスカスはいろいろな種類を 28 種類標本にしました。

バオパブ パンヤ科

バオパブ属には 9 種類あり、ほとんどはアフリカ、マダガスカルに分布しています。花博で植えられたのは、オーストラリアにあるグレゴリー種で、日本では始めて 8 月 14 日 20 時 24 分に開花しました。それを標本にしました。

バンクシア ヤマモガシ科

この仲間には熱せられると、果実が割れて種子を散布する種類もあります。オーストラリアの山火事の多い環境に適応した植物です。オーストラリアの植物は、バンクシア、グレビレアなど 50 種類ほどを標本にしました。

チャボイランイランノキ バンレイシ科

花は緑色から黄色に変化します。高価で有名な香水の原料です。花に催淫作用があり、インドネシアでは新婚のペットに花びらを撒くといわれます。標本にすると黒色になり、花や葉はばらばらになってしまいました。

カシフバアジサイ ユキノシタ科

北アメリカ原産のアジサイで、日本には最近導入されました。花は白色で円錐形にまとまって多数つきます。葉は卵形で浅く 5 裂し、その形から柏葉アジサイと名付けられました。アジサイは 12 種類を標本にしました。

クリンホシダ ヒメシダ科

遠州地方で発見された、ホシダの突然変異で生じたシダです。葉の先が塔の露盤上にある、装飾の九輪に似ているので名付けられました。故志村義雄先生が栽培されていたのを増殖したものです。シダは 82 種類を標本にしました。

以下の植物標本の説明は簡単にします。

セツカンズギ スギ科 雪冠杉

春の新芽が黄白色になる。

イヌマキ星流 マキ科

下向きに枝が垂れるイヌマキ。

ヤエザキクサギ クマツヅラ科

八重咲きのクサギ。

ゲンペイクサギ クマツヅラ科

花は赤色で萼は白色。

カレープラント キク科

標本にしてもカレーの香りが残る。

チェリーコスモス キク科

八重咲きのコスモス。

ルドベキア ラキニアタ キク科

原種は日本に帰化している。

アカバワタ アオイ科

全体が銅赤色のワタ。

ホザキノトケイソウ トケイソウ科

赤色の花を房状につける。

セリ フラミンゴ セリ科

共に白色や赤色の美しい斑が入る。

ムラサキミツバ セリ科

全体が赤紫色のミツバ。

バラ ブルーヘブン バラ科

花は藤色、青いバラの 1 つ。

シグレグワ クワ科

下向きに枝が垂れるクワ。

ジャカラダ ノウゼンカズラ科
 熱帯の三大花木の1つ。
 アリオギネ ハケイフォリア アオイ科
 ブルーハイビスカスに似るが葉は線形。
 ゴシキドクダミ ドクダミ科
 葉に白色や赤色の美しい斑が入る。
 ニコティアナ ライムグリーンナス科
 緑色の花が咲くハナタバコ。
 カリブラコア プッチニア ナス科
 径5mmの世界最小の花をつけるペツニア。
 ペツニア ファイアーチーフ ナス科
 世界で初めてのペツニアの赤色品種。
 ヨウラクホオズキ ナス科
 果実が瓔珞(ヨウラク)に似る。
 ケムリノ キヤングレディー ウルシ科
 花の塊が煙のように見える。
 ヒゴロモコンロンカ アカネ科

大きな萼が真赤で美しい。
 イポメア バタタス ヒルガオ科
 葉を鑑賞するサツマイモ。
 サザンクロス ピンクスター ミカン科
 星形の桃色の花が咲く。
 ダルシヤンピア トウダイグサ科
 二枚の大形の総苞が目立つ。
 アメリカアジサイ ユキノシタ科
 小形の装飾花が密につく。
 ゴジカ アオギリ科 午時花。
 赤色の花が午後に咲く。
 ペニセタム ルブルム イネ科
 全体が紫色になるチカラシバ。
 ブラジルシシガシラ シシガシラ科
 胞子囊群が葉の裏面に線状につくシダ。
 ナチシダ イノモトソウ科
 実の幅1m以上になる大形のシダ。



図書紹介

日本産水生昆虫 科・属・種への検索

川合禎次・谷田一三 編

2005年01月20日発行、東海大学出版会、
 1320ページ、

(2005年3月末までの特別定価)税込み 30240円、
 (4月以降) 税込み 33600円

水生昆虫とは、一生の一時期でも水中や水面、水辺で生活する昆虫の総称です。したがって水生昆虫には様々な分類群の昆虫が含まれ

ます。陸水の生態研究者、環境評価関係者にとって水生昆虫は調査・研究の対象となっており、目~種への検索の必要性が求められています。しかし、分類や検索に関する資料は、これまで各種の図鑑、学会誌、研究会誌等に散見され、情報の収集に多くの労力を費やしていました。本書は各分類群の専門家によって、既知の日本産水生昆虫の検索が網羅されておりますので、研究者や愛好家は必携の一冊といえるでしょう。もちろん、河川や湖沼の環境に興味がある方もお勧めの一冊です。

本書は、1985年に刊行された「日本産水生昆虫検索図説(東海大学出版会)」の改訂新版です。といっても、ページ数でいえば3倍以上のボリュームになり、その内容も完全に一新されているものが多く、改訂新版というよりは、完全に作り直した仕上がりになっています。特に、本書では幼虫の分類・検索の改定に加え、前作ではあまり扱われなかった成虫についての知見が大幅に加筆されています。圧巻ともいえるそのボリューム(まるで電話帳のような厚さです)のために、非常に高価である点と、顕微鏡をのぞきながらの実際の検索時に、大きすぎてやや扱いにくいという点はありますが、その情報量をみれば納得されると思います。

本書を読んで感じたことは、これほどの情報が得られながらも、いまだに分類が未解明であったり、生息環境や分布が不明なグループが多数存在したりすることです。本書は、現時点での総まとめといえますが、これを基に日本産水生昆虫に関する更なる発見が期待されます。

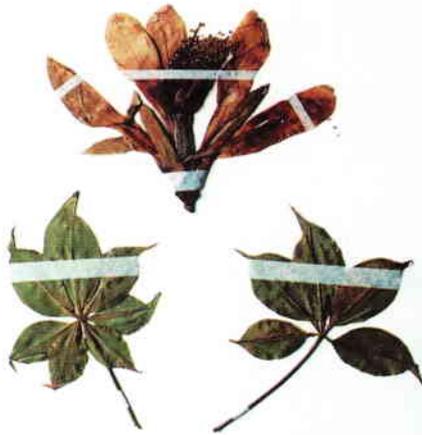
(北野 忠)

浜名湖花博の保存標本

杉野 孝雄



アメリカアナンデム
アナベル



オーストラリア
バオバブ



グレビリア
ココナッツアイス



ルドベキア
ラキニアタ



ハイビスカス
コーラルレッド



カシワバ
アジサイ



ブラジル
シンガシラ



カレー
プラント



ナチシダ



静岡県哺乳類 (3)

ミスラモグラ

三宅 隆



静岡県の植物 (3)

リンドウ

宮崎一夫



オノエリンドウ



サンフクリンドウ (淡青色、白色、アカイシリンドウ)

高山性リンドウの色々

宮崎一夫 (遠州自然研究会)

静岡県の高山に生息しているリンドウ科の植物には、ミヤマアケボノソウ、ヒメセンブリ、サンプリンドウ、オノエリンドウ、アカイシリンドウ、トウヤクリンドウ、コヒナリンドウ、オヤマリンドウの8種があります。そのうち、「改訂・日本の絶滅のおそれがある野生生物 植物編 (以下, 国 RDB)」と「まもりたい静岡県の野生生物 植物編 (以下, 県 RDB)」に掲載されている種は表の通りです。

これらのうち、ミヤマアケボノソウとオヤマリンドウだけが両 RDB に掲載されていません。ミヤマアケボノソウは、常に湧き水が流れている付近に生息しています。南アルプスで湧き水が出ているところは少ないので、自ずとミヤマアケボノソウが見られる機会も少なく「県 RDB」に加えたい気もします。その凛々しい花姿は湧き水で喉を潤している時に登山の苦労を癒してくれます。それに比べて、南アルプスに8月の下旬ころ登ると、オヤマリンドウは草地に、トウヤクリンドウは岩礫地に多く見られます。このオヤマリンドウは、北海道から四国まで分布しています。そして南アルプスでも全域に分布しています。一方のトウヤクリンドウも、北海道から本州の中部地方にまで分布していて、やはり南アルプスの全域に分布しています。しかし、トウヤクリンドウは「県 RDB」に注目しなければならぬ種としてのカテゴリーで掲載されています。その理由は、本州の中部地方というその分布の南限が本県にあたるからです。生育している最南の地では光岳で見えています。先に記したミヤマアケボノソウも南アルプスが南限ですが、最南の地は長野県側に位置する池口岳です。南限に自生する植物の

記録は、将来における地球の指標となるかもしれません。

これらの花は、ふつう表に示した色をしていますが、色の白い株もあり、白花品の存在が図鑑に記載されている種もあります。その白花を近年、南アルプスで視認したのでその種を○で表に記しました。また同じ種でも草丈の高い低いが観察される種があるので、定性的ではありませんが、高さの幅を表に記しました。

ミヤマアケボノソウは白花品もあると記載されていますが、見たことがありません。そして草の高さは、同じ生育場所でも株によって高低の幅が広いです。ヒメセンブリは高山性のリンドウの間では一番遅い時期に花が開く種で、数株しか見ていませんが、白花品もなく、株による高さにそれほどばらつきはありません。サンプリンドウはしばしば白花も混じって見られます (カラーフォト参照)。そして高さのばらつきもあります。オノエリンドウは数株の白花を得ました (カラーフォト参照)。そして高さのばらつきもありました。アカイシリンドウはまばらに単生して真っ直ぐに立ち上がり、白株を見たことはありませんが、高さのばらつきがあります。コヒナリンドウは、一番早い時期に花が開き、数株しか見ていませんが矮小で高さのばらつきがありません。オヤマリンドウは、株立ちして白花もごく稀に見られ、高低の幅が広いです。

このように白花株が存在する種は、草丈の高低の幅も広いように感じています。花の色が変化に富む種は、成長面でも環境の相違に対応する能力が高いのではないかと思って山を降りました。

和名	県 RDB	国 RDB	花色	白花	視認	高さの幅
ミヤマアケボノソウ			暗紫色	+		広い
ヒメセンブリ	○	○	淡青色	-		狭い
サンプリンドウ	○	○	淡紫紅色	+	○	広い
オノエリンドウ	○	○	紅紫色	+	○	広い
アカイシリンドウ	○	○	紅紫色	+		広い
トウヤクリンドウ	○		淡黄色	-		狭い
コヒナリンドウ	○	○	淡青色	-		狭い
オヤマリンドウ			青紫色	+	○	広い

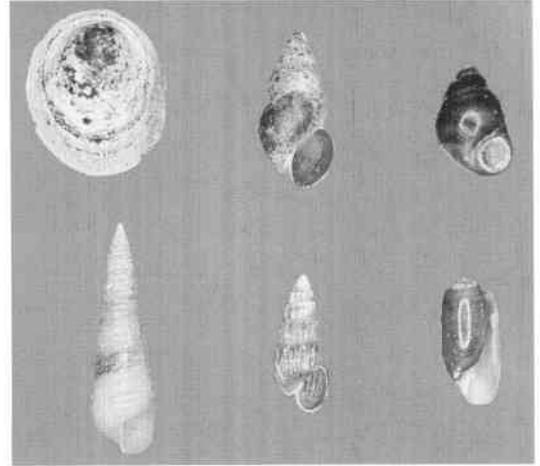
静岡県の貝（1）

浜名湖の干潟の貝

加藤 徹（遠州自然研究会）



奥浜名湖の干潟の風景



浜名湖の干潟の貝

左上から、ヒナユキスズメ、カワグチツボ、ウミゴマツボ、ヨコイトカケギリ、シゲヤスイトカケギリ、コヤスツララ

数年前、とある沖縄の離島の浜で懐かしさに立ちつくしたことがあります。

幼い頃、両親に連れられて浜名湖の潮干狩りに行きました。木造の小さな舟で渡った瀬には、無数の小さな貝が散らばっており、独特の匂いが立ちこめていました。今でも、浜名湖に行けばホソウミナナという細長い円錐形の貝が無数に砂の上を這いまわっています。しかし、この独特の匂いはしません。干潟にこのような匂いがあることなど、すっかり忘れていたのに、この離島の浜に立ちこめていた匂いに、昔の浜名湖の面影が脳裏にはっきり浮かんできました。

一見、浜名湖の干潟の様子は、昔とそれ程違っていません。ホソウミナナ以外にも、カラフルな模様のイボキサゴやアラムシロなどもたくさんいます。もっと泥質な場所に行けば、カワグチツボやウミゴマツボ、カワザンショウガイなどがたくさんいます。

しかし、少し詳しく調べれば、昔とは明らかに違うことに容易に気が付きます。昔はたくさんいたハマグリが、今はほとんどいません。他にも、ウミナナやフトヘナタリなども一部で見られるだけとなりました。一方、コウロエンカフヒバリガイなどの帰化種がおびただ

しく生息していたりします。干潟独特の匂いなくなってしまうのも、このような環境の変化によるものかもしれません。

とはいうものの、浜名湖はまだ良い環境が残っていることも事実です。前述のイボキサゴやカワグチツボ、ウミゴマツボなどは全国的にはかなり減ってきている種です（WWF Japan Science Report 3, 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状, 1996）。その他、ヨコイトカケギリ、シゲヤスイトカケギリ、コヤスツララ、ウミナメクジ、ユウシオガイ、ソトオリガイなどという全国的な減少種（同）もそれ程珍しくはありません。また、ヒナユキスズメ、サザナミガイ、ヌカルミクチキレ、ムラサキガイなどという稀少種も生息しています。

今年になってようやく、静岡県でも県版のレッドデータブックが出版されました。しかし、これには干潟の貝は含まれていません。干潟の持つ生物多様性維持機能や水質浄化機能などについて説明が図られる一方、全国的に干潟の生物の減少が報告される現状にあります。まだ貴重な自然が残る浜名湖のより詳しい調査と、その保全に向けた干潟生物の県版レッドデータブックの作成が待たれるところです。

静岡県の哺乳類 (3) ミズラモグラ

三宅 隆

ミズラモグラは、幻のモグラである。何しろ、このモグラの存在は 1880 年頃から知られてはいたが、当初はアズマモグラの「変わり」と考えられており、昭和 15 年発行の原色日本哺乳類図説には本種の記載はない。その後形態の違いなどから、これが別種と確認されたのである。別種になって以降も捕獲例は少なく、現在でも国内で確認された地域は少ない。そして、その習性や行動は、今も謎に包まれたままである。

「日本の哺乳類」(阿部 永監修 東海大学出版会 1994 年発行)においても、その生態については「低山帯から高山帯までの森林に生息するが、生息数は多くない。昆虫類、ミミズ類、ジムカデ類、ヒル類などを捕食する」と、ほんのわずかに記載されているだけである。

県内での確認例も、鳥居春己著の「静岡県の哺乳類」では、南アルプスと富士山須走での記録が記載されているだけである。

今回、静岡県のレッドデータブック作成にあたって、哺乳類部会としてこの種の確認に努めてきたが、捕獲はおろか情報も殆ど得られなかった。わずかに、調査開始以前の南アルプス光岳と、開始後は本川根町の寸又左岸林道での死体拾得例のみで、やはり幻のモグラであった。静岡県版レッドデータブックは 2004 年 4 月に出版され、ミズラモグラは静岡県カテゴリーとしては、要注目種(分布上注目種)とされた。

レッドデータブック発刊後も、私は追加調査のため県内を飛び回っていたが、2004 年 7 月 4 日、前日からの泊り込みでの富士山二合目林道のコウモリ調査を終え、早朝新五合目に向かう途中、富士山スカイラインの高鉢を過ぎたところで、道路上に黒い塊を見つけた。車を止めて見てみると、なんとミズラモグラの轢死体であった。私自身としては、始めて見つけたミズラモグラであった。そしてその日、新五合目からの帰途、殆ど同じ場所で、後続の吉倉さんの車が、道路を横断しているモグラを見つけ捕まえたのである。これがまたミズラモグラであった。

幻のモグラを短時間に 2 頭も見つけたのである。

生きているモグラを持ち帰り、それからモグラの飼育が始まった。昔、日本平動物園で獣医業務をやっていたころ、何回かモグラの飼育を試みたが、毎日、体重と同程度食べるという餌のミミズを十分量確保できず、短期間で全て死なせてしまった経験がある。しかし、ミズラモグラは体重も少ないし、なんとかなるだろう。死んだらすぐ標本にすればいいと気楽な気持ちで、飼い始めた。

しかし飼うとなるとやはり大変だ。アクリル製の飼育箱に土をいれ、その土は毎週 1 回取り変える。でないと尿で臭くなるのである。土は湿り気のある物を使い、霧吹きで加湿してやる。土が乾燥していると、ミミズを食べるとき、両前足で持って食べるため、両手にミミズの体液が着き、爪先が汚れ、そこに土がくっつき丸く団子となり、土の中に潜っていけなくなるのである。それを取ってやると噛み付いてくることがあった。

餌のミミズ採りも忙しかった。体長 10cm 前後のものを、1 日 20 匹位は必要なのだが、はじめの頃は、短時間で結構たくさん取れたのが、日がたつにつれ同じ場所では採れなくなり、1 週間分のミミズを確保するのがだんだん大変になってきた。そこで代用食としてミルワームを与えたが、食べることは食べるのだが、やはりミミズのほうが好きなようであった。

また、少なくなくて済むように、大きいミミズを入れてみたが、口に入らない位大きいのは食べなかった。ミミズを食べるときは、両前足ではさんで、端からツルツルと流し込むように食べるのだが、全部は食べず必ず最後の所は残していた。

飼うとやはり可愛く、尻尾をプルプル振る仕草や、丸くなって眠る様子に見入ることもしばしばであった。しかし、11 月に入り、動物園内でも、なかなかミミズが確保できなくなり、遠くまでミミズ採集に出かけなければならなく

なってきた。そんな苦勞を察してか、12月4日、残念ながら原因不明で急死してしまった。飼育期間は丁度5ヶ月であった。

この個体は、県内産の貴重な資料として、剥

製標本や頭骨標本となり、私のコレクション箱に収まっている。内容物もDNA分析などに有効に使っていただけたらと思っている。



静岡県の自然研究会の紹介 NPO 法人しずおか環境教育研究会

はじめまして。私たち「しずおか環境教育研究会（愛称：エコエデュ [Eco-Edu]）」は静岡県中部地域を中心に、地域子ども達やその親、また環境教育を指導する立場の人達に対して環境教育の実践と研究に関する事業を行い、環境の保全や教育全般に寄与することを目的としています。

私たちの前身は、1989年に有志が集い「清沢わくわく村」自然体験プログラム活動を実施したことに始まりま

す。その後、山の暮らし体験の場作りや環境教育出前授業などを行いながら活動を継続・発展させ、1999年に任意団体しずおか環境教育研究会を設立、2000年にNPO法人としての認定を受け、自主事業を始め、県からの委託事業なども実施しています。

現在エコエデュ自然学校として「森のちびっ子クラブ（月2回）」「わんぱく題楽（月1回）」「わんぱく里山（月1回）」「親子里山つくり塾（月1回）」「工作楽家（6月から週1回）」「里山インストラクター養成講座（9月から6回）」「大人の山あそび（月1回）」といった一般参加型のメニューを用意しています。また、「プロジェクトワイルドエドゥケーター資格取得研修（随時）」や「環境道場への講師派遣」、地域づくりや環境に関する委員会への出席、ワークショップの開催など、約40人の会員（2005年2月現在）と共に様々な活動をしています。その中の一つとして、昨年3月にオープンした県立森林公園ビジターセンター「バードピア浜北」で自然体験プログラム実施業務を行っています。センターでは自然情報の提供、各種イベントや展示の企画実施、一般・団体来館者への対応、小・中学校の総合学習対応、広報活動などを行っています。エコエデュとしては新たな活動の場ですが、関係者や地域住民、自然学習指導員などの有識者など、まわりの多くの方々から支えていただいています。

【県立森林公園ビジターセンターのご案内】

愛称：バードピア浜北 開館時間：9:00～16:30 入館料：無料

休館日：毎週水曜日(祝日の場合はその翌日) 年末年始(12/29～1/3)

TEL：053-583-0443 FAX：053-583-2700

森林公園に関するHP：<http://www.shinrinkouen.com/>

<http://homepage3.nifty.com/shinrinkouen/>, <http://kankyou.pref.shizuoka.jp/fureai/sinrinkouen.htm/>

県立森林公園は天竜奥三河国定公園にも指定されており、センターでは太陽光と風力による発電、雨水の利用、屋根の緑化など環境に配慮した設計が見られます。館内では昆虫や植物標本、ジオラマやパネル展示で森林公園の自然を紹介。また、創作展示室では、自然をテーマにした写真や絵画など、一般の方々の作品を主に展示しています。今年2月11日には10万人目の来館者を迎えました。

私たちエコエデュは“しずおか”の美しい自然が次世代に引き継がれていくことを願って活動しています。興味がある方はお気軽にお問合せ下さい。

＜エコエデュのことをもっと知りたい、仲間になってみたいという方は・・・＞

〒420-0035 静岡市七間町 3-4-503 TEL/FAX：054653-3311

<http://www10.ocn.ne.jp/~ecoedu/index.htm/> E-mail：eco-edu21@ninus.ocn.ne.jp

年会費：正会員 3,000円、賛助会員 10,000円 ニュースレターの発行：月1回